

第7回 輪島市復興まちづくり計画検討委員会

議 事 録

日 時：令和6年12月20日(金)14時00分～15時00分

場 所：輪島消防署 2階大会議室

出席者：別紙名簿のとおり

■議事概要

1. 開会

2. 挨拶

(坂口市長)

元日の震災発災からやがて1年を迎えようとしており、9月の豪雨からも3ヶ月が経った。今年も師走となり、お忙しい中、姥浦委員長をはじめとした委員各位やオブザーバーの皆様にご参加いただき、心から感謝申し上げます。

発災以来、人命救助・避難所の運営、ライフライン、インフラ等の応急復旧に奔走してきましたが、これからは本格的な復旧・復興に向けて動いていくことになり、そのためには、復興のための指針が必要になる。この委員会はそうした思いもあり、5月の第1回検討委員会から本日まで計7回の検討委員会が開催され、本日、復興まちづくり計画の素案のご提案をいただけると聞いている。

復興まちづくり計画の策定に向け、わじま未来トークや住民懇談会、各種団体の皆様との意見交換会など市民の声を聞かせていただく機会もあり、また、委員の皆様からは検討委員会で多くの意見をいただき、改めて感謝申し上げます。

本日提案される計画については、今後、市の内部の災害復興対策本部で決定させていただき、公表に向けてパブリックコメント等の手続きを行う予定である。そして、この計画に基づき、具体的な施策を進めていくことになる。

輪島市の強みでもある観光や農林漁業などの産業振興、輪島塗をはじめとした、これまで守ってきた伝統文化や美しい街並み・景観など、守らなければいけない財産を後世に伝えていくことが必要であると考えている。一方で、これまで実施していなかった事やできなかった事にも積極的にチャレンジしていく必要があると考えている。市民の皆さんと一

丸となって、「もとよりもっと 新・輪島」のスローガンのもと、震災前よりも豊かで魅力的で、安心して暮らせる輪島市の実現に向けて推進していきたい。

皆様におかれましても、引き続き、ご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。
本日が最後の委員会になるが、よろしく願いたい。

3. 会議

(1) 復興まちづくり計画の検討について

※事務局より説明

姥浦委員長) p.13の被災状況の更新、p.33のイラストの追加、p.67に林業・治山について修正が行われた。委員のご指摘を踏まえた修正になるが、何かご意見はあるか。

山下委員) 今回の復興まちづくり計画については、みんなで作り上げてきたが、今後の実現化に向けたプロセスについてどのように考えているのか。市民みんなで作っていくという思いで「みんなでつなぐ」というスローガンを設定したと記憶しているが、この「みんなでつなぐ」の部分を市としてはどのように考えているか。

例えば、発災から1年が経つなかで、各方面で復興まちづくり計画を待たずに各地区で様々な取組をしてきている。そして、住民懇談会を開催し、その内容を本計画に反映されていると思う。一方で、町野地区では災害公営住宅の検討状況について、市役所から情報が出ていない中、農協から災害公営住宅の候補地について話を聞いたりする場面があった。「みんなでつなぐ」というスローガンがあるものの、仮設住宅の福祉拠点の設置など市役所からの説明がない、もしくは、説明会はあるが既に決定事項となっているなど、「みんなでつなぐ」という基本理念に沿っているのか曖昧な部分もみられる。実施内容自体は基本計画に基づくものであり、間違っていないが、「みんなでつなぐ」という基本理念に沿って活動をどのようにしていくのか、そのプロセスについて教えてほしい。

事務局) 災害公営住宅については農協から聞いたとのことであるが、おそらく組合員に対する説明があったと思われる。土地取得については、市として未確定な部分があるため、農協側からの先行説明になったのだと考えられる。土地の取得が完了すれば、市として皆さんに広く周知でき、詳しい説明ができるが、取得ができるか分からない状態での説明は難しい。仮設住宅の福祉施設について、担当課から聞いた話では、説明会など開催され話し合いがされると聞いている。今後、復興に向けた様々な取組が進んでいくと思うが、関係者としてしっかりと話し合いを進めていきたい。

例えば、輪島朝市周辺のシンボルプロジェクトについては、明日、まちづくり協議会が発足される予定である。先行して、輪島港の復興についても漁業者の要望

を聞きながら進めていると聞いている。今後も、関係者の意見を聞きながら実現に向けて進めていきたい。

山下委員) 市民向けの説明会が開催されていることは確かであるが、もっと早く情報開示ができないのか、というのが懸念点である。仮設住宅の建設の際に、コミュニティ施設の設置を検討していて、そのスペースが確保されているようである。災害公営住宅についても、今後のまちづくりに関わるため、議会で通って初めて決まることは分かるが、もう少し事前に検討段階においても住民に話をすることをしてはどうか。これは福祉施設やコミュニティ施設の検討でも同様である。このような施設を予定しているなど、住民ヒアリングがあっても良いと思っており、そのような説明があってこそ、「みんなでつなぐ」のスローガンに沿った復興まちづくりになると考える。調整済みの事項を報告されても住民の意見を反映できないため、可能ならば事前に相談をしながら進める方法を検討してほしい。計画段階から市民の声を聞くような機会を設けないと、スローガンからのズレが発生するので、進め方について調整いただければと思う。

事務局) ご指摘の通りかと思う。災害公営住宅を例にとっても、来週の23日に町野の農協組合員に災害公営住宅の説明をする予定で、福祉施設についても説明できるように担当者に伝えておきたい。

山下委員) よろしくお願ひしたい。現状では噂が独り歩きする状況で、町野ではJA町野支店の場所での災害公営住宅の建設の話が独り歩きしており、支所では回答ができないとのことで、地域が混乱している。組合員向けにだけでなく、情報を適宜、小出しにしながら、みんなでつくる流れにしてほしい。

事務局) まずは組合員、次に住民と段階的に小出しに説明していく。

坂口市長) 復興まちづくり計画で様々な施策が決まってくるので、丁寧な進め方をしたい。農協の場合は、農協側が先に組合員に話をしたようであるが、災害公営住宅の建設については、農協から土地を提供する話があり、所有者である組合員との話を優先しており、組合員の承諾を得ていない中であつたので、市から情報が出せなかった実情もある。今後は、学校の統廃合も含めて皆さんに情報提供しながら議論をしていくような進め方としていきたい。

姥浦委員長) 今の話は重要なポイントである。計画段階での住民参画と事業が決まった実施段階での住民参画とは違うため、今後の施策の実施に向け、計画段階での住民参画の機会については、心に留めていく必要がある。

その他ご意見はあるか。

(一同意見、質問なし)

姥浦委員長) 特段無いようなので、本検討委員会において「輪島市復興まちづくり計画(案)」について賛成の方は挙手をいただきたい。

(全員挙手)

姥浦委員長) 全員の賛同を頂いたので、こちらの提言書を委員の総意として委員会を代表して私から市長に手交する。

(2) 復興まちづくり計画の提言書の手交

(姥浦委員長より提言書手交)

坂口市長) 少し時間がかかるかもしれないが、この提言書は輪島市復興の指針になる。長期にわたる検討に感謝申し上げ、本計画に基づき、様々な具体的な施策を実施していきたい。施策の実施の際には、先程ご指摘があった通り、市民の皆様とともに、「みんなでつなぐ」をしっかりと肝に銘じて進めてまいりたい。委員の皆様においても、引き続きご支援をいただきたい。本当にありがとうございました。

4. その他

※今後のスケジュールについて(事務局より説明)

(スケジュールについて意見、質問なし)

姥浦委員長) 計画案が策定されたことを受けて、各委員の皆様からの思いをご自由にお話いただきたい。

久岡委員) 本計画書は取り組むべき施策が全方位網羅されて素晴らしい内容になっていると思う。ただ、この計画が絵に描いた餅にならぬよう、委員のみならず、市民からの意見も丁寧に把握して進めてもらいたい。ありがとうございました。

中門委員) 出張で委員会を欠席することもあったが、皆様の意見を拝見することができた。これからどのようなようになるか分からず不安な部分もあったが、復興まちづくり計画の検討を通じて、みんなで作ってあげていくものだということを実感している。ありがとうございました。

藤井委員) 第1回検討委員会において、計画内容が総花的にならずに輪島市独自の特徴的なものにしてほしいと意見をしたが、今回の計画は全方位網羅されながらも輪島の特徴が感じられるものになったと思う。毎回、名古屋から会議に参加していたが、意外に輪島が近いと感じていた。今後は会議の出席だけでなく、経済産業省としても継続的に支援を続けていきたい。ありがとうございました。

猿谷委員) 復興の中で、交通・観光はハード整備が終わった後の範疇になる。交通については人が来てもらうこともあれば、出ていく部分もあるため、輪島市だけで完結するものではなく能登という広域的な視点で考えていく必要がある。観光についても、守っていくものもあり、新しい視点を入れていく必要もあり、その点も含めて国土交通省として支援していきたいと考えている。

森 委員) 委員に公募で参加したが、計7回の検討委員会の間、門前地区のこと、輪島市のこと、また母親の立場で子供のことを真剣に考えた。冒頭の山下委員の指摘の通り、この計画に基づき市民の声を聞きながら進めてほしいと思う。門前の小学校では、2学期から急に門前中学校の校舎を間借りすることになったり、保育所についてもホールが傾いたままで直されていないまま、先日やっと説明会があり、1月の国の査定が終わらないと進められないという話をやるときくことができた。門前の高校も三学期からどうなるのかわからず、急に聞かされることが多々ある。こうした説明会があっても、結論ありきで既にゴールが決まっているように感じる事が多い。先程市長が話したように、計画段階から市民の意見を聞いてほしい。周りの方はいろいろな思いや意見を持っていると思うので、市民を巻き込んでいく方がみんなで参加できるだろうと強く思う。自分は福祉・医療系の仕事しか経験がなかったが、委員会においては様々な業種の方の意見を聞けて勉強になったので、お礼を申し上げる。

山下委員) 半年間ありがとうございます。様々な意見を言わせていただいた。久岡委員のいう通り、絵に描いた餅にならないようにすることが重要である。地震が起きる前からあった課題に対し、それがもっと深刻になって存在している。地震前と同じことをやってもダメであり、何か違う観点からやることも、難しいが、みんなでつなぐという観点から、受け身だけでなく、計画段階からたくさんの方を巻き込み、積極的に説明をし、案を示し、議論しながら進めていくことが重要である。賛否両論で難しいということもあると思う。やりにくくなることも想定されるが、こういった計画や案を示し、事業系については事業者が思いを持って進めていくなど、一緒に話し合っ、1つずつ進めていくと良いまちになっていくと思う。「みんなでつなぐ」観点では、時間がかかると思うが、市民も当然良いまちにしていきたいと考えているため、積極的に市民も関与できるように、一緒に検討する機会を設けてもらいたい。これで最後ではないということなので、引き続きよろしくお願ひしたい。ここまでの計画作成に対してたくさんの方にご協力いただいたことにお礼を申し上げたい。

山崎委員) 半年間、公募市民として参加させていただき、ありがとうございます。皆さんの意見が集まってこんなに分厚い計画書ができて、驚いている。本当に細かい部分

までみんなで話し合いながら計画書ができあがったと実感している。今後は一市民として生まれ育った輪島のため、同世代を巻き込みながら実行していく段階だと思うので、周りを巻き込みながら活動していきたい。

井田委員) 6月に作成された県の創造的復興プランの考え方と輪島市の復興まちづくり計画については、向いている方向は全く同じであり、県も輪島市も同じ方向に進んでいると思う。わじま未来トークに参加したが、行政に任せきりになる会議かと思いきや全く逆で、参加者の皆様が積極的で、熱い思いで色々なアイデアを出されていたのが印象的であった。そのようなアイデアをいくつも拾いながら復興できたらいいと思う。県としてこれからも力になっていく必要があると当然思っており、復興基金の活用だけでなく、開設された能登官民連携復興センターも活用してもらいながら、輪島市と連携して一緒に復興を目指していきたい。ありがとうございます。

信太委員) 復興まちづくり計画が策定できてまずはよかった。我々はインフラの立場から意見をするが、主役は市民であり、市民がどのような生活をし、どのような生業を作って輪島をどうしていきたいかということが、プランを通して表れてくるので、それを大事にしながら計画を実行に移していくということかと思う。国土交通省としても一緒になって復旧復興に邁進してまいりたい。

大下委員) 被災者見守り相談支援事業ということで、市内で暮らしの再建を考えている方を1件ずつ訪問している。輪島市の方針はどうなっているのか、自分の暮らしがどうなるのかは全く考えられないという声をよく聞いた。その中で、今回の復興まちづくり計画が公開されるとの事であるので、市民の皆様にもこの計画を見てもらい、市民一人一人が、「輪島市はこうなっていくんだ」「それならば自分はこういう風にしていきたい」と、輪島市の将来を考えるきっかけになり、安心して暮らせて、輪島市に自分も参加していくという気持ちになってもらえれば良いかと思う。ありがとうございました。

久保委員) 一番初めの会議で、海・山・川という話をした。地震でいろいろな状況になったが、その前は豊かな海・山・川があり、漆の里としての産業があり、地域に根差した朝市があった。今はブランド化された感じであるが、朝市は市民が持ち寄って反映させてきたものである。地震と水害で人口が減少すると思うが、豊かな海・山・川があれば、戻ってくると思っている。私は区長会の会長であるが、洋上風力についても市を発展させるために賛成・反対の前に、まずは勉強会をしようとのことで早速、エキスパートを呼んでの講演会を設定するなど、進めている。今後は、復興まちづくり計画の施策が実現した頃には、生きているか分からないが、その過程を見守っていききたいと思う。

最後に、これをつないでいくのは教育である。人口が少なくなって学校がなくなるとは違うと考える。生徒が一人であっても、先生が来て、教育を進めるべきである。まちづくり、ひとづくりにとって、歴史を伝えていくためにも学校・教育が大切であり、教育のハード・ソフトの整備が重要であると考えている。国の法律もあるが、将来を見据えて特区などの制度活用などの検討をお願いしたい。ありがとうございました。

姥浦委員長) 本検討委員会での私の仕事はフレームワーク、枠組みをつくることで、その中で2つ重要な点があると考えている。1つ目は輪島らしさを計画に入れていくこと、2つ目はいかに行政と市民が一体となって作っていくか、ということ。実際に事業や活動を進めていく際、行政、市民がそれぞれで活動してもうまくいかない。その第一歩として、復興まちづくり計画があると考えており、復興まちづくり計画をもとに、市民がどのように関わっていくかを考えることが重要であると考えている。輪島らしさと行政と市民の一体性という2つが計画づくりの中での大きな課題である。

その中で、1点目の輪島らしさについてはいろいろな意見をいただいたし、2点目の市民参画での計画プロセスについても未来トークなどの機会もあり、その中で市民の声を聞いてきたと考えている。

本計画はあくまでスタートであり、今後考えていくべき課題としては、輪島らしさを地区レベル、各活動レベルのフィールドにどのように落とししていくかが必要になる。その時には、集落らしさ、地区らしさとは何かを考えることが重要になる。それを実現するには、住民と行政がどのように一体的に活動するかが重要である。今までは輪島市全体で考えてきたことを、どのように地区レベルに落とししていくかが重要な課題である。

もう一つは、市民がどのように主体的に活動していくか、いかにそのような場を設定するかである。これまでは行政が事業をして市民にとって公平性の確保が重要であったが、今後のまちづくりは行政が事業を組み立て、市民が活動することが通常になると考える。そのためには、地域で頑張る人達をどのようにサポートするのが重要である。疲れている方をサポートすることはもちろんであるが、本当にやる気がある人にどれだけ頑張ってもらえるか、支えられるかが重要であり、その中から輪島らしさ、その集落らしさが出てくる。プレイヤーとまちや集落が一体となり、市民も主体的に進めるべきで、行政やその他の復興に関わるプライベートなセクターの方などが支援していくことが重要である。市民にどれだけ主体的になってもらうか、それをどうサポートしていくかということが2つめの重要な課題であると考えている。あくまでも本計画はスタートであり、これから10

年以上かかる計画でもあるため、皆様には引き続きそれぞれのフィールドで活躍していただくとともに、これからも検証の場でアドバイスをいただきながら進めていきたいと考えている。

これまで、委員の皆様、そして、各委員の一つ一つの意見を拾い挙げ、本計画に落とし込んでいただいた事務局の行政担当者及びコンサルタントの皆様にもお礼を申し上げます。

5. 閉会

【会議の様子】



- 以上 -